

耐低温性ピーマン有望系統の育成

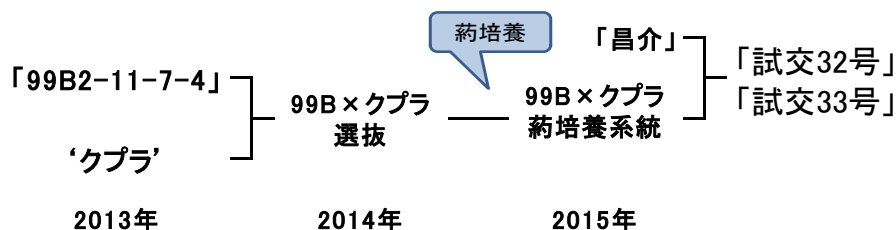


図1 育成経過

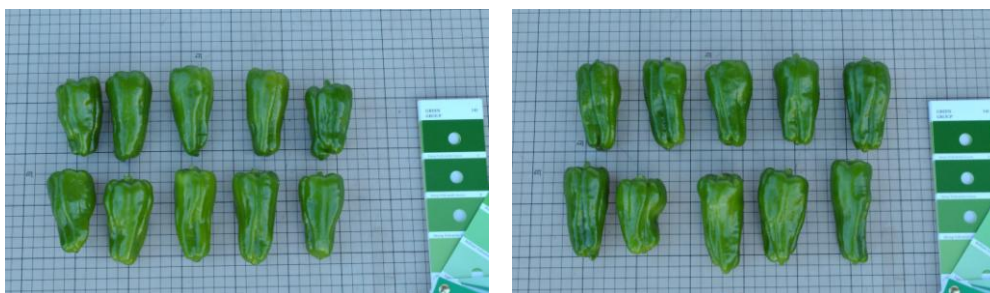


写真 「試交32号」(左)と「試交33号」(右)の果実

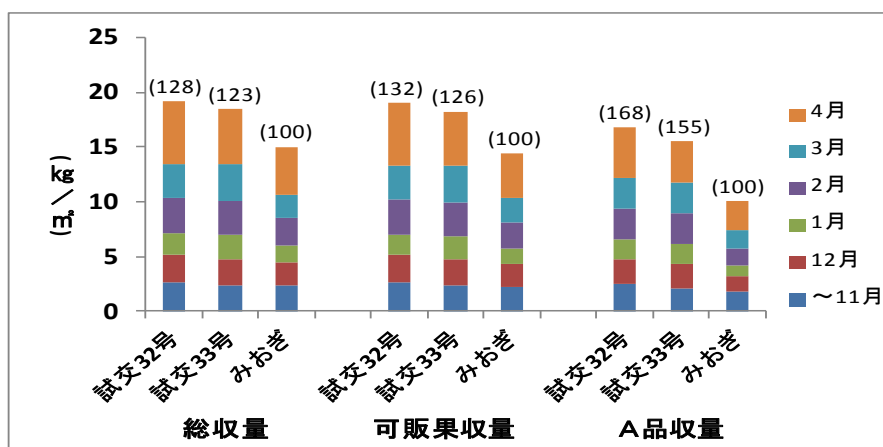


図2 16℃での栽培における収量特性

※()内の数値は「みおぎ」を100とした時の比率

促成ピーマンは平均最低夜温18℃で栽培されていますが、栽培夜温を下げることであれば燃料費の削減が可能となります。そこで、2013年から最低夜温16℃でも栽培できる耐低温性ピーマンの育成に取り組んでいます。

高知県育成の花粉親系統「99B2-11-7-4」にオランダの市販品種「クプラ」を交配し、耐低温性や果実特性、収量性に優れた個体を選抜しました。この選抜個体を薬培養して形質を固定し、「昌介」との交配によって、「試交32号」および「試交33号」を育成しました(図1)。

両系統は「みおぎ」に比べて、果色はやや淡緑ですが、果実の光沢がやや強く、果揃いに優れています(写真)。栽培初期の草勢は「みおぎ」並ですが、摘心時の草勢はやや強く、主茎径や主枝径は太くなります(データ省略)。最低夜温16℃での生産力検定の結果、両系統の総収量、可販果収量およびA品収量は、栽培全期間において「みおぎ」より多くなりました(図2)。

両系統が品種としてすぐに使用できるか、さらに果色を濃くする必要があるかを現地の意見を聞きながら検討していきます。

(園芸育種担当 細美祐子 088-863-4916)